若者のひろば

はじめに

船橋　聖一

２０１０年１０月２日、群馬弁護士会主催のシンポ「子どもの貧困と教育格差」が開催された。私と青木姉妹（綾香さんと静香さん）がパネラーとして参加した。当時２２才だった。

二人は２００７年３月に新田暁高校を卒業した。静香さんは私の助言もあり、また教育フォーラムの学習支援にも参加して時間はかかったが看護師となった。綾香さんは調理系の専門学校への進学をあきらめ、Ａ食品会社に就職した。

綾香さんと静香さんは双子で、私は静香さんの担任だった。静香さんが相談事で私の家に来るとき、たいてい綾香さんも同行していた。綾香さんの仕事の話も聞いたが、続けられないと思い、高崎健康福祉大学の介護福祉科への進学（社会人入試枠）を勧めた。多額の奨学金を受けなければ進学できないし進学しても生活が続かない。しかし、当時群馬県が介護系の学校で学ぶ者に対して奨学金制度を用意していた。かつ、就職後５年間県内の介護施設で働けば返済は免除するというものだった。私はそれを知っていたので、綾香さんの意欲次第で進学と４年間の生活と就職後の返済は可能だろうと考えた。

何回か自宅に来てもらい、4年間でかかる学費や生活費、就職後の月々の返済額を計算し、また入試に関して大学の先生から説明も聞いた。そうして２００９年９月４日に綾香さんは進学を決意した。

綾香さんは県の奨学金（一括貸し付けではない）以外に、日本政策金融公庫や日本学生支援機構から入学金や初回授業料などの支払のための融資を受けた。

２０１０年４月、２１歳で高崎健康福祉大学に入学した。２０１４年３月大学を卒業し介護福祉士の資格を得て、Ｂ介護施設に就職して７年が過ぎた。

私は介護という仕事が本当に好き

丸木　綾香

1　このままでいいのか

高校３年の春（２００６年）、両親に「申し訳ないが進学は諦めてほしい」と言われた。本当は専門学校に行きたかったが、ただ「分かった」と返事するしかなかった。あの頃は就職して家にお金を入れられればどこでも良かった。工場の流れ作業なら人間関係の煩わしさもないと思った。

工場の仕事は思った以上にハードだった。力の抜き方がわからず、がむしゃらに働いた。疲れが取れない日々が続いた。体重もどんどん減っていった。怒鳴り声や嫌がらせもあった。手取りで月 128,000 円だったが２年経っても上がらず、毎日２時間の不払い残業もあった。入社後しばらくして、自分はこの仕事を１０年後も続けていけるだろうかと悩みはじめた。

2　決断と見通し

双子の静香が船橋先生の家に相談事で行くので私も同行した。何回目かのときに今の仕事の話をした。「きみは手に職をつけたらどうだろうか？」「人はきみを裏切るかもしれない。

でも資格はきみを裏切らない。この先も必ず支えてくれる。」と言ってくれた。そこから行動に移すまでが早かった。どんな仕事に就きたいか、学校に行くとしてまず何が必要なのか。必要な書類やお金のことを先生は何度も確認してくれた。

3 学び直し

小中高とほとんど勉強をしてこなかった私が福祉の大学の授業を受けていた。合格したのはいいが授業についていくのは本当に大変だった。大変だったが不思議と苦ではなかった。英語の基礎学力がないのでこのままでは単位を取れないと思い、英語の先生に相談に行くと、「毎回の授業で青木さんを指名するので間違ってもいいから答えなさい」と言われた。介護実習の記録が不十分と指摘されて、担当の先生に相談に行くと、書き方を丁寧に教えてくれた。自分の力が足りていないことはわかっているので、いろんな先生のところへ行って「どうにかしてください。努力するので」と伝えたら、対応してくれた。学べることが嬉しいと感じた。介護福祉士の国家試験のために厚いテキストを勉強することも、やり甲斐があった。

授業料と教科書代を補うため、土日には１２時間のアルバイトをして頑張った。

4 仕事の大変さと楽しさ

認知症の利用者とそうでない利用者とがいるデイサービスで働いている。利用者間のトラブルもよくある。認知症の利用者は言ったことやしたことを忘れてしまうので、他の利用者とトラブルが生じる。その都度両者をフォローして同じことが起きないように工夫し、職員間で話し合う。

利用者は来る回数が人によって違い、曜日によって利用者集団の雰囲気も変わる。そんななかでレクリエーションを構成するのは難しい。歌を歌うのが好きな方が多い日、話が好きなひとが多い日・・・、日々考えながらレクリエーションを行う。

勤めて１年目は、レクリエーションは下手でひどいものだった。利用者の方々は文句も言わず「大丈夫、上手になっている」「楽しかったよ」と励ましてくれた。その優しさに応えなければいけないと思うようになっていった。職場の看護師のＴさんがいろんなアドバイスをくれ、進行の仕方を指導してくれた。だんだん余裕を持って取り組めるようになった。Ｔさんがいなければ今の私はいない。利用者の方々に楽しんでもらえるようＴさんといっしょにレクリエーションを盛り上げている。

5 今、この文章を書くこと

高校を卒業し就職してから、学べるチャンスが再び訪れるなどと思ったことはなかった。大学に行って介護について学べたこと、今の仕事ができることを幸せに思う。

今の職場に就職を希望したのは、実習で訪れたときに正規採用の男性が比較的多い職場だったことがある。家族を養える条件、安心して働ける条件があるのだと感じた。

私は介護という仕事が本当に好きだ。自分よりもはるかに年上の人と話をする機会は、この仕事をしていなければ得られないと思う。日々刺激を受けている。この先もいろいろと悩みながら仕事をすると思う。看護師のＴさんやあたたかい上司がいる職場でこれからも頑張っていきたい。